

---



---

## 研究報告

---



---

医療看護研究32 P.52-63 (2023)

# 訪問看護師はどのように高齢療養者の「その人らしさ」を捉えているか －国内文献のメタ統合の試み－

## How Do Home Visiting Nurses Capture the “Personhood” of Older Adults Requiring Long-Term Care?: A Meta-Synthesis of Japanese Studies

松浦志野<sup>1)</sup> 伊藤隆子<sup>2)</sup>  
MATSUURA Shino ITO Ryuko

### 要旨

日本の訪問看護師は高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的とし、医中誌Web版を用いて、「訪問看護」「その人らしさ」等のキーワードを含む過去10年間（2012～2022）の文献を検索し、訪問看護師による高齢療養者の「その人らしさ」を尊重した看護実践が豊富に記述されている11論文を選出した。これらの文献から訪問看護師は高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのかに関連する具体的な記述を抜き出し、メタ統合の手法を参考に二次分析を行った。その結果訪問看護師は、【過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する】【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を理解する】【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】ことで高齢療養者の「その人らしさ」を捉えようとしていた。高齢療養者が自分らしく生き抜き、そして「その人らしく」死ぬことを支援するためには、訪問看護師は、自身の「その人らしさ」の捉え方を自覚し磨き上げ、その人しか生きられない固有の人生により近づけるよう、専門職としての能力を発揮することが必要であることが示唆された。

キーワード：訪問看護、その人らしさ、高齢療養者

Key words：visiting nursing, personhood, older adults

### I. 緒言

日本看護協会の看護職の倫理綱領（2021）の前文には、「看護は、あらゆる年代の個人、家族、集団、地域社会を対象とし、健康の保持増進、疾病の予防、健康の回復、苦痛の緩和を行い、生涯を通して最期まで、その人らしく人生を全うできるようにその人のもつ力に働きかけながら支援することを目的としている」とある。さらに日本看護協会は、訪問看護入門プログラム

（2016）の中で、訪問看護の重要な役割を「長期療養者の生活の質を向上し、住み慣れた地域の中でその人らしい療養生活を支援する」こととしている。また、厚生労働省の介護報酬改定の骨子（2015）でも、中重度の要介護者や認知症高齢者への対応の更なる強化として、「本人及び家族の意向に基づくその人らしさを尊重したケアの実現を推進する」ことを強調している。

このように「その人らしさ」を尊重したケアは、看護・介護の分野において一般的な文言となっているものの、「その人らしさ」という概念は明確になっていない。英国のKitwood（1997）は、認知症の人へのケアに関連して提唱した概念“Personhood”について「『他者』によって一人の人

1) 順天堂大学大学院医療看護学研究科博士後期課程  
Doctor's Course, Graduate School of Health Care and Nursing,  
Juntendo University

2) 順天堂大学大学院医療看護学研究科  
Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University  
(May. 6. 2023 原稿受付) (Jul. 26. 2023 原稿受領)

間に付与される、関係性と社会的存在の文脈における立場または社会的関係」と定義し、その後日本においてこれを「その人らしさ」と訳された経緯もあった。しかしその後“Personhood”は、パーソン・セントラード・ケアの文脈で、「一人の人として、周囲に受け入れられ、尊重されること」「自分で自分の価値を感じられること」（水野、2008）と再定義された。すなわち、“Personhood”は認知症の人の「自分らしさ」と言い換えることもできよう。

日本では、黒田（2017）が看護学分野における「その人らしさ」の概念分析を行い、「内在化された個人の根幹となる性質で、他とは違う個人の独自性を持ち、終始一貫している個人本来の姿、他者が認識する人物像であり、人間としての尊厳が守られた状態という特性を指す」と定義した。ただし、黒田は「らしさ」という表現は日本独自のものであり、「その人らしさ」は「人格」を意味する欧米のPersonhoodとは異なる概念であると述べている。

在宅看護分野における訪問看護の対象の8割以上は、高齢療養者である（厚生労働省、2021）。特に高齢療養者は、周囲や関係者への配慮や遠慮がみられ、明確な自己表現を控えることを伝統的に求められてきた文化背景があり、さらに認知機能低下や意識障害のある療養者は、臨床上の意思決定の場において明確な自己表現が不可能であることが多い。また、訪問看護師が対象とする高齢療養者は、10年以上にわたって訪問看護を受けながら徐々に衰弱していく人もいれば、末期の状態でも退院してわずか数日で看取りが終了する場合もある。実際に、訪問看護ステーションで在宅看取りをおこなった高齢者のうち、半数以上は認知症等の理由によって本人からの意向が確認できなかったことが報告されており（花里、2017）、訪問看護師は在宅療養者の看取りにおいて、本人の意思確認が十分できない場合に困難を感じていることが明らかになっている（森本、2014）。

訪問看護師には、本人の意思決定能力が減退しても、あるいは意思疎通が困難となっても、その人しか生きられない固有の人生を尊重し、本人にとっての最善を実現できるよう（会田、2017）、人間としての尊厳を保持しつつ本人の望む健康で幸福な人生を全うできるような支援を提供することが求められている。しかし、訪問看護師による「その人らしさ」を尊重したケアに関する先行研究については、事例検討などにおいて訪問看護師が「その人らしさ」を把握し実践している記

述が散見されるものの、訪問看護師が捉える「その人らしさ」あるいは「その人らしさ」を尊重したケアについて明確にした論文は少ない。

そこで本研究では、国内の訪問看護師による高齢療養者の「その人らしさ」を尊重した実践過程が詳細に記述されている最新の文献を探索し、訪問看護師は高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのかを明らかにし、高齢療養者が最期まで自分らしく生き抜くことを支援する訪問看護のあり方について考察したいと考える。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 用語の定義

その人らしさ：黒田（2017）の定義を用い、「内在化された個人の根幹となる性質で、他とは違う個人の独自性を持ち、終始一貫している個人本来の姿、他者が認識する人物像であり、人間としての尊厳が守られた状態という特性を指す」とする。

### 2. 文献の抽出

まず、医学中央雑誌 Web Ver.5を用い過去10年間の原著論文等を検索した。検索式は「その人orその人らしさ」and「訪問看護or在宅看護」and「高齢者」とし、検索は2022年6月に行った。次に、検索された論文の研究テーマや研究方法、研究成果から、高齢療養者の「その人らしさ」を尊重した訪問看護師の看護実践が詳細に記述されている文献を選定した。

### 3. 分析方法

Noblit&Hare（1988）とPatersonら（2001）のメタ統合（meta-synthesis）の手法を参考にした。メタ統合とは、過去に産出された複数の独立した研究を分析し直して質的研究を統合する研究方法である。利点として、一次研究を行なった研究者の関心とは異なる関心からの二次分析を行って、新たな知見を見出すことができる。

分析は以下の手順で行った。1）選定した論文を精読する。2）各論文の研究目的、研究データ（内容、収集方法）、研究成果を要約する。3）一次研究の研究成果から、訪問看護師が高齢療養者の「その人らしさ」を捉えて実践していると研究者が判断した記述を抜き出し表にする。4）3）の記述が表している現象を文脈や意味を損ねないよう誰にでもわかる一文（コード）にし、その一文を意味内容の同じもの同士をまと

め小カテゴリーを生成する。5) 生成した小カテゴリー一から訪問看護師が高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えたのか整理しカテゴリーを導出する。

#### 4. 倫理的配慮

文献はすでに公的な雑誌に投稿されたものを使用し、出典を明記した。事例等の個人名等細心の注意が

表1 文献一覧

No	著者 発表年	タイトル	論文の 種類	目的	調査対象 (背景・人数)	調査方法・内容
1	古野ら 2020	行動・心理症状の薬物療法を受けている認知症高齢者に対する訪問看護師の判断の視点	原著	BPSDに対する抗精神病薬を用いた薬物療法を受けている認知症高齢者に対する、訪問看護師の判断の視点を質的帰納的に明らかにする	PSD薬物療法中の認知症高齢者に対してサービスを提供している訪問看護事業所で勤務する看護師12名	半構造化面接による質的帰納的研究：抗精神病薬の影響を踏まえたBPSD悪化の見極め、効果的な非薬理的介入の見極め、より良い余生に向けたその人らしさの尊重、など15サブカテゴリー、5カテゴリーが生成
2	坂根 2021	訪問看護師が在宅高齢療養者に服薬自己管理に向けた支援を行う看護プロセス	研究	服薬自己管理が困難な在宅高齢療養者に訪問看護師が支援を行う看護プロセスを明らかにする	臨床看護経験10年以上かつ訪問看護経験8年以上とし、所属施設の管理者から推薦を受けた看護師19名	修正版GTAを用いた質的帰納的研究：服薬自己管理ができなかった原因を明確にする、服薬に対する関心が低いいため服薬できていないと推察する、など26概念、7カテゴリーに集約
3	黒田ら 2021	Good deathを支える訪問看護師が大切にしている思い	報告	在宅での看取りを実践している訪問看護師が、在宅でGood Deathを支えるために大切にしている思いを明らかにする	在宅看取りの経験を有する訪問看護認定看護師5名	半構造化面接による質的帰納的研究：本人・家族のやりたいことを尊重する、家族の思いを尊重した声をかける、など11サブカテゴリー、4カテゴリーに大別
4	中村 2021	熟練訪問看護師が高齢者の訪問看護を通して感じるやりがい	研究	熟練訪問看護師が高齢者の看護を通して、どのようなことを経験し何にやりがいを感じているのかを明らかにする	1県内の訪問看護ステーションで、5年以上訪問看護に携わっている熟練訪問看護師10名	半構造化面接による質的記述的研究：その人らしく生き生きと生活できるようかわる、その人が自分らしく過ごせるよう療養生活を支える、など8カテゴリー、3コアカテゴリーが抽出
5	市来ら 2020	セルフケアと意思疎通能力が低下している在宅療養者に対するケアにおける訪問看護師の困難と対処	報告	セルフケアと意思疎通能力が低下している在宅療養者に対するケアにおける訪問看護師の困難と対処について明らかにする	訪問看護ステーションに勤務している訪問看護師3名	質的記述的研究：意思疎通が難しい在宅療養者を全人的に理解しようという姿勢で、その人らしい生活のための支援やその人の人生を肯定的に意味づける関わりをする
6	高橋ら 2017	訪問看護師が在宅療養高齢者の代弁意思に添う終末期医療の提供に必要なと認識した情報	原著	訪問看護師が在宅療養高齢者の代弁意思に添えたと認識した事例を通して、わが国の文化的性格に則した代弁意思に添う終末期医療の提供に必要な情報を抽出する	訪問看護ステーション(4機関)の訪問看護師7名	質的記述的研究：代弁意思の把握に必要な情報として「その人らしい暮らし」と「意思表示が可能な時期の終末期医療に対する意思」が抽出
7	高橋ら 2013	在宅療養高齢者の終末期医療に対する意思把握に訪問看護師が必要とする情報	研究報告	終末期医療の提供ができたと判断した事例から、終末期医療の意思把握に必要な情報を明らかにする	訪問看護ステーション(4機関)の訪問看護師5名	質的記述的研究：生き方、など意思把握に必要な情報として8カテゴリーが抽出
8	高橋ら 2013	訪問看護師による在宅療養高齢者の終末期医療に対する意思把握の方法	研究報告	訪問看護師の意思把握に対する認識から意思把握の方法を明らかにする	訪問看護ステーション(4機関)の看護師12名	内容分析による質的記述的研究：意思把握の方法として、本人や家族がどのように過ごしたいから把握する、本人や家族の暮らしぶりから推測するなど、8カテゴリーで構成
9	奈良岡 2020	住み慣れた自宅で、その人らしく生きるために在宅看取りとグリーフケアを通して	看護研究	がん終末期で自宅退院を希望した療養者とその家族への訪問看護を振り返り、在宅看取りについての理解を深める	80代女性(がん終末期)とその長女(主介護者)	事例検討：がん終末期で入院中は絶食であったが、「何か食べたい、自宅で入浴したい」という希望を尊重し、退院後「2ヶ月ぶりだ」と摂食回復支援食を涙を流しながら食べ、希望する居間で1か月過ごし永眠
10	山下ら 2021	早く死にたいと訴える認知症高齢者のスピリチュアルベインとそのケア	事例報告	認知症高齢者への看護の事例を振り返り、認知症高齢者のスピリチュアルベインとそのケアについて考察する	90代男性 仙骨部褥瘡、認知症、希死念慮	事例検討：「早くあの山(墓のある)に行きたい」と訴える認知症高齢者に対し、訴えに耳を傾け、生活の様子からその人の価値観を捉え、ケアのあり方を検討
11	前原 2020	看護師にとって老衰死とはどのようなものか 応援という関わり 看護師Fさんの語りより	研究報告	臨床で起こっている老衰の看取りという事象を掘り起こし、F看護師が老衰の看取りをどのように体験しているかを書き出す	10年以上の看護経験のある訪問看護師が支援した、90歳代で妻と二人暮らしの高齢者	事例検討：生きるための願いを聞き出すのが看護、応援という関わり、など療養者自らが決めた死という目標に向かって高齢者への支援の語り



なされていたが、本調査においても個人情報の保護を遵守した。

### Ⅲ. 結果

#### 1. 対象文献の概要

データベースより42文献が検出された。このうち文献のタイトル・抄録から本研究の目的に該当しないと判断した21文献を除外した。これらの文献の内容を精読し、高齢療養者の「その人らしさ」を捉えた看護実践が具体的かつ詳細に記述されている文献を選択した結果、11文献を分析対象とした。各論文のタイトル、論文の種類、目的、調査対象（背景・人数）、調査方法を表1に示した。

#### 2. 訪問看護師は高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのか

分析の結果、訪問看護師は高齢療養者（以下、療養者と記載する）の「その人らしさ」をどのように捉えているのか、は3つのカテゴリーに統合された(表2)。訪問看護師は、【過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する】【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する】【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】ことで高齢療養者の「その人らしさ」を捉えようとしていた。以下に各カテゴリーの特徴を述べる。カテゴリーを【 】、小カテゴリーを〈 〉、文献中の記述を「斜体」、文献番号を（ ）で示す。

##### 1) 【過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する】

このカテゴリーは、訪問看護師が療養者の現在の姿だけを見るのではなく、生活歴や人柄など、疾患や障害をもつ前の療養者を知ろうとすることで「その人らしさ」を類推しようとしていたことを示す。

訪問看護師は、「穏やかな優しい人だった、自分の事は自分で決める性格だった」(文献6)と〈療養者の本来の人柄を振り返り〉、「漁師をしていて、昼夜逆転の生活を長らくしてきたので、朝の薬っていうのが飲めない」(文献2)のように〈若いころからの療養者の生活習慣と関心ごとを知る〉ことで、現在の療養者の言動の理由を納得していた。また「在宅で過ごしていくのに、ただ生きていくってのじゃだめだと思えますよ。昔ほどはできないかもしれませんが、本人さんとかご家族に、昔何が好きでしたかって尋ねて。そういった、本人さんが少しでも楽しみごとをもって余生を過ごせないかなって、考えます」(文献1)

のように〈若いころの思い出を掘り下げ療養者が楽しみにしてきたことを知る〉ことや、「今ある人を見るんじゃなくて、その人がどんなふう生きてきたか、何を大事にしてきたかっていうようなところを知っていくことで、その人がどんな死を迎えていたらその人らしさのかなって思っている」(文献3)のように〈療養者がどんなふう生きてきたか・何を大事にしてきたかを知る〉ことや、〈家族・介護者との関係など、これまで療養者が築いてきた人間関係を知る〉ことで、これまでの生き方や価値観、家族や介護者との関係やその関係に至るエピソードから「その人らしさ」を類推し、現在および将来の支援につなげようとしていた。

##### 2) 【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する】

このカテゴリーは、訪問看護師が訪問時に見聞きする療養者の現在の姿から、「その人らしさ」について理解し、納得し、受け入れていることを示している。

訪問看護師は、「睡眠のパターンが乱れてないか、本人とか家族とかのお話を聞いて見極めるようにしています」(文献1)のように〈療養者本人や家族から生活スタイルや好みを尋ねる〉ことや、「初めの頃は『わしはもう96歳で先は知れている。もういかん』と言っていたのに、私が行くと『おっ』と、凄く嬉しそうな顔をしてくれるようになり、あんたと旨いもの食べに行きたい』と言ってくれて」(文献4)と〈療養者が現在楽しみにしていることを了解〉していた。また、日々自宅を訪問することで「(薬を)セットしているのに飲まないとか…(中略)…まったく薬に関心がない」(文献2)ことに気がつき、〈日常生活の療養者の言葉や行動から好みや価値観を推し量る〉ことをしていた。同時に、「何十年も家族と住んできた家で、母親が使っていたポータブルトイレが残っているなど、自宅で過ごした母親のことが感じられる家だった」(文献7)ことから〈自宅という環境に療養者が愛着を持っていることを了解〉していた。また、「天井だけでなく庭を見ながら、介護が必要な妻の様子もわかり、孫たちをはじめ大事な家族といっしょに生活できることがうれしい」(文献7)ことを知ることで、〈療養者にとって安心できる家族やヘルパーがいることを了解〉していた。このような療養者の希望や価値観は、「どういう人柄でどういうことを望んでいるかは、長いかかわりのなかでだんだんとわかる、ケアをしながら、あるいは会話しているなかから少しずつ聞きとっ

表2. 訪問看護師は在宅療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているか

## 1) 過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する

小カテゴリ	論文中のデータ	文献番号
療養者の本来の人物を振り返る	訪問看護師は「穏やかなやさしい人だった」、「頑固な生き方の人だった」、「自分の事は自分で決める性格だった」、「やりたい事をやる性格だった」、そして「若い時は勝気な人だった」と語った。	6
	訪問看護師は「夫を看取った時に自分は家で逝きたいと家族に伝えていた」「骨折して入院した経験もあり病院に行きたくないと話していた」そして「入院中は自宅に帰ると言っていた」と述べており、意思決定が可能な時期の本人の意思を認識していた	6
若いころの思い出を掘り下げ療養者が楽しみにしてきたことを知る	在宅で過ごしていくのに、ただ生きていくってのじゃだめだと思うんですよ。昔ほどはできないかもしれませんが、本人さんとかご家族に、昔何が好きでしたかって尋ねて。そういった、本人さんが少しでも楽しみごとをもって余生を過ごせなかなって、考えます	1
	いろんな話の中で学生時代の歌の話になったので、『その歌、聞かせてください』と言うと、それまでは蚊の鳴くような返事だったのに、ベッドの上で大声で歌ってくれた	4
	訪問看護師は「肌の手入れや美容に気を使っていた」、「ハイカラでおしゃれが好きだった」、「妻と1人でよく旅行した」、「子供時代が一番だった」および「よく庭いじりをしていた」というように本人の楽しみに関する情報を把握していた お酒が好きで宴会するのが大好きな人だった	6 7
若いころからの療養者の生活習慣と関心ごとを知る	(薬を) 飲めなかったわっていうようなことを言われることがあって、なんでかなって何うと、もともと若いころから漁師をしていて、昼夜逆転の生活を長らくしていたので、朝の薬っていうのが飲めない 怪しいなって思うのは、(薬を) セットしているのに飲まないとか。忘れちゃうって人もいるので。だから全く服薬に関心がない	2 2
	療養者がどんなふう生きてきたか・何を大事にしてきたかを知る	今ある人を見るんじゃないくて、その人がどんな風に生きてきたか、何を大事にしてきたかっていうようなところを知っていくことで、その人がどんな死を迎えていったらその人らしさなのかなって思っている 肌の手入れや美容に気を使っていた、ハイカラでおしゃれが好きだった
家族・介護者との関係など、これまで療養者が築いてきた人間関係を知る	訪問看護師は「娘の支えとしての母だった」「昔の夫婦によくある妻がいなくてだめな人だった」「嫁はよく話しかけていて姑とよい関係だった」「過去にはいろいろあったが互いに認め合っている感じだった」および「介護される以前から嫁に辛く当たったことはなかった」というように本人にとって介護者がどのような存在であるかを認識していた	6
	療養者が体調を崩し入院した際、通帳と印鑑を長男夫婦に預けた。退院後、長男夫婦が盗ったと思いい包丁を持って長男宅を訪問、応じた家族が警察に通報した。以来、嫁は療養者のことになるとパニック症状が起こるため、行き来はなくなった	10

## 2) 現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する

療養者本人や家族から生活スタイルや好みを探る	抗精神病薬って眠くなるじゃないですか。それで昼間眠ってしまって寝つきが悪くなって睡眠のパターンが乱れてないか、本人とか家族とかのお話を聞いて見極めるようにしています	1
	どういときに症状が落ち着いているかご家族さんから聞くことがあります、抗精神病薬でもし動けなくなったら怖いなって。すぐに筋力とか落ちちゃうじゃないですか。家族とかからどれくらい動けますか、って聞くようにしています	1
	薬を飲まれる場所、台所で飲まれるんだったら台所に置くとか、お部屋に帰って飲むんだったらベッドの近くとか、そういうふうな本人さんにどこで飲まれるか場所を聞いた	2
療養者が現在楽しみにしていることを了解する	私が行くと『おっ』と、凄く嬉しそう顔をしてくれるようになった」「初めの頃は『わしはもう96歳で先は知れている。もういかん』と言っていたのに、段々その言葉がなくなって『あんたも旨いもの食べに行きたい』と言ってきて	4
	訪問看護師は「嚥下力が低下してからアイスクリームやゼリーを好んだ」、「コーヒーや紅茶が好き」、「ステキやシチュウ等洋風の食べ物が好きだった」「ADLが低下しても好きな庭を見て過ごした」「自分が植えた金木犀の香りを楽しむ」「布団で寝ることにこだわっていた」「好きな音楽の中で過ごす」そして「リビングのソファに腰掛けてテレビをることが好き」ということからADLが低下した状態でも本人が楽しめることを認識していた	6
	82歳まで山菜を採りに行くなど、山歩きをしていた 洋画のビデオが好きでだいたい時間は洋画のビデオを見ていた	7
	摂食回復支援食を試食し「2か月ぶりだ」と涙を流しながら食べ、次は何を食べようかとパンフレットを嬉しそうに見ていた、自宅に帰った際には食べることや畑に行くこと、入浴することを強く望んでいた	9
	怪しいなって思うのは、(薬を) セットしているのに飲まないとか。…(中略)…全く服薬に関心がない 「天井だけでなく庭を見ながら、介護が必要な妻の様子もわかり、孫たちをはじめ大事な家族といっしょに生活できることがうれしい」と言っていた	2 7
日常生活の療養者の言葉や行動から好みや価値観を推し量る	どのようなことをして過ごすことが好きだったかや、食事の嗜好など、日常生活の細々とした情報から考える、認知症はあったが、声をかければうなずいたり微笑んでくれ穏やかだったので、満足だと思つたと推測した、家っていいね、と言葉をかけると、とてもいい表情をする	8
	自宅に帰った際には食べることや畑に行くこと、入浴することを強く望んでいた	9
	もう自分では布団の上げ下げができない。だから座椅子で夜明けとともに起き、日が暮れたらそのまま座椅子で寝るんです	10
	訪問看護師は「いつも家族がいて家族に守られた生活だった」「妻と過ごすことが好きだった」「近所の人が入って住みなれた環境だった」その他「寒がりでも暖かいことを好んだ」という内容から本人にとってどのような環境が望ましいかについて情報を得ていた	6
自宅という環境に療養者が愛着を持っていることを了解する	母親が使っていたポータブルトイレが残っているなど、自宅で過ごした母親のことが感じられる家だった 何十年も家族と住んできた家	7
	這ってでもトイレに行く様子から、自分の家のトイレに入りたいという自分の家に対する愛着を感じた どんな立派な部屋よりも住み慣れた自分の家のベッドに寝ることができるのがいちばん、と話していた	7
	自分の家の風呂に入り普通に生活したいと話していた	7

小カテゴリ	論文中のデータ	文献番号
療養者にとって安心できる家族やヘルパーがいることを了解する	「天井だけでなく庭を見ながら、介護が必要な妻の様子もわかり、孫たちをはじめ大事な家族といっしょに生活できることがうれしい」と言っていた	7
	介護者のヘルパーとの関係も穏やかで、リンゴをすって食べさせてもらい、冗談を言ったり、家族といるようだった	7
	夫婦二人暮らしで、平屋建てで、どこにいても声の届くような家だった	7
	自分が育てた孫の、朝、行ってくるねという声が聞こえるだけでも安らぎの場となる 自宅であれば家族が24時間傍にいることができる	7
時間をかけて少しずつ療養者の気持ちや希望を聞き取る	本当にひたすら話を聞いているだけで、アドバイスはしますが、行動するのは本人だと思って。ナビゲーターになっていくしかない	3
	何度か訪問し、昔の話など、本人のいろいろな情報を把握するなどして、信頼関係をもとに意思を引き出す、どういう人柄でどういうことを望んでいるかは、長いかわりのなかでだんだんとわかる、ケアをしながら、あるいは会話しているなかから少しずつ聞きとったり、本人の気持ちを察する	8
疾患や薬剤に影響されない療養者の状態を見極める	抗精神病薬って眠くなるじゃないですか。それで昼間眠ってしまって寝つきが悪くなって睡眠のパターンが乱れてないか、本人とか家族とかのお話を聞いて見極めるようにしています	1
	抗精神病薬でもし動けなくなったら怖いって。すぐに筋力とか落ちちゃうじゃないですか。家族とかからどれくらい動けますか、って聞くようにしています	1
	どういうときに症状が落ち着いているかご家族さんから聞くことがあります。あ、こういう時に落ち着いているんだなってのがわかれば、それが日常生活に取り入れられないかなって、考えます	1
	抗精神病薬でうまく言いたいことが言えない場面ってあるのかなって。きっと症状のほうか（影響が）大きいでしょうけど	1
	あんまり症状だって決めつけずに徘徊だってご家族に強く当たってしまう理由だって、何かしらあるんじゃないかなって思うんです。全部が全部そうじゃないかもしれないですけど、本人さんの立場に立った時、ご家族に強く当たる理由がわからなくもない、って時があるんですよ	1
	振戦があると生活を送りづらく感じるんじゃないかと思います。手が震えてると、家事がしにくくなるとか、本人も嫌だと思っんです	1
療養者の身体機能に合った道具があることを理解する	ストローでお茶を飲んだりするとか、薬を飲む。そのストローも太さとかあるみたいで。その人に合ったストローの太さとか長さとかあって、口に入っていく量とかそこら辺を提案したこともある	2
療養者の「やりたいこと」を刺激し、引き出す	その人は身体を動かすことが好きなんですけど、訪問の時に話を聞くと、ちょっと散歩しながらお話し聞かせてもらえませんか、散歩しながら聞いてみたりそれを繰り返して普段から散歩の習慣がつけばいいなって思ってます	1
	書道や俳句を趣味にしていたことを知り、やるように勧めると療養者が「震える手で、自分の力で懸念に書いてくれた」ので、文化祭に書道の作品を発表することを勧めた	4
医療により制限されない、療養者の好みに合った生活をしていることを了解する	むせるようになっていたが好きなビールはどうしても飲みたいというし、食事がとれなければアイスなど好きなものを食べていた	7
	食事療法などの制限をしないで、自分の好きなように暮らす A氏は「私にはこれ(座椅子)がいちばんです。そのことで床ずれがどうなろうとそれはもういいんです」と答えた。…(中略)…褥瘡については、治癒ではなく褥瘡に伴う苦痛を最小限にすることを目標とした	10
捉えた療養者の希望や価値観を、他の看護師と共有して判断が偏らないようにする	タイムリーに相談できるスタッフに相談し、思いを共有する。経験者に相談してアドバイスをもらう	5
	いろいろな場面で看護師がかかわって得た情報を共有することで、自分だけの判断に偏らないようにする	8

3) 療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る

療養者が「こうありたい」と考える姿について理解する	「病気の妻の介護をしたいということが退院の大きな理由だった」「退院は無理だといわれても、妻を看たいという気持ちが強く退院してきた」	7
	「妻の病気の会の会長だった」「患者家族会に出席できない自分の状況を連絡し最期まで仕事の責任を果たそうとしていた」	7
	就職する孫にスーツを買ってあげることやいっしょに買い物することなど、退院したらしようと思ったことがほとんどやれた	7
	お舅の見舞いに酸素をしながらも起きて茶の間に行き挨拶をした	7
	独身ではあったが、長男として家を守ってきた	7
何気ない会話から療養者の最期に向けての意向や希望を探る	相手の感情を受け入れながら、何気ない会話のなかで（最期についての）希望を把握する	8
	どのように過ごしたいか（という話）から、終末期の意思について確認する	8
	終末期ということは告知されておらず、どう暮らしたいかという聞き方で意思を把握した	8
	深刻にならないような雰囲気をつくって意思を確かめる	8
	一見、治療には役立たないような日常生活のなかから意思の把握をする 確認はしていないが、在宅で亡くなる覚悟をしている、と状況から受け止めた	8
意思決定が可能な時期の療養者の言葉から、最期の過ごし方への希望を押し量る	訪問看護師は「何もしないで逝かせて欲しいと家族に話していた」「自然のままという母親の希望を娘が聞いていた」と語っており、同様に意思決定が可能な時期の本人の意思を把握していた	6
	訪問看護師は「夫を看取った時に自分は家で逝きたいと家族に伝えていた」「骨折して入院した経験もあり病院に行きたくないと話していた」そして「入院中は自宅に帰ると言っていた」と述べており、意思決定が可能な時期の本人の意思を認識していた	6
生活歴や価値観から、療養者らしい最期の過ごし方を押し量る	生活歴やどのように生きてきたかから、終末期の過ごし方を推測することができる	8
	今ある人を見るんじゃなくて、その人がどんな風に生きてきたか、何を大事にしてきたかっていうようなところを知っていくことで、その人がどんな死を迎えていったらその人らしさなのかなって思っている	3



小カテゴリ	論文中のデータ	文献番号
	本当に全然「もう明日死ぬ」「明日死ぬと思う」とか言ってる。(そう言ったのが)金曜日。土曜日に当番の人が気になるからって、夜に行ったら、だいぶ衰弱してはって。次の日の朝にもう亡くなって。でも、本当に苦しんだ感じも見られなくて。1週間自ら食を断つてというのが、まあかっこいいと(その時は思った)。でも、今思うと身体が受けつけなかったのかなという気もする	11
	「食べへんかったら人間は死ぬねん」って言ってはった。それが普通のことやっていう感じで。「年取ったら食べれんようになってしまふ、普通のことや、だから、もう食べてええようになったんや」とか言ってはったんで、ああ、そっかと思ってる。この家で生きられないこと、生きられない自分は「もういいかなとか、もう要らない」って。ああーっ、食べれないとは言っていない。もう食べていいようになったと(言っていた)。だから、本当に一言一言が、普通のことやとすんなり(受け入れられた)。	11
療養者が望む死の迎え方を否定しない/応援する	最期の別れが近くなくても家族に何で泣くのといい、皆で酒を飲んだ	7
	命は短くても好きなように暮らしたい、という意味を読み取った	8
	うちのステーションではみんな応援してたというか、邪魔しないっていうか、そうやって(本人が食事をしないということ)を決めてはることを。	11
療養者が死の前後の儀式に関する希望を持っていないか確認する	家族と近い親族だけで葬式をしてほしいと長男に伝えていた	7
	先祖代々の墓はないので、自分たちが最初だと思い購入していた	7
	昔の仕事仲間が同じ地域に土地を買って住んでいるので、お墓もみんなで見に行き買ったりしていたと思う	7
	「墓を購入し葬式会社も決めておき、残された家族は選択するだけでいいように本人が準備をしていた」「本人と妻で、葬式を含め死を迎えていくことについて話合うことができていた」	7
療養者の最期が満足できるものであったかを振り返る	本人が残された家族の大変さを考えて戒名についての希望を息子に伝えていた	7
	穏やかで非常にいい表情をして亡くなって。あーそうなんだと思った	6
	その人がやり残したことがあることを表情から感じとった	8

たり、本人の気持ちを察する」(文献8)のように繰り返しの訪問により〈時間をかけて少しずつ療養者の気持ちや希望を聞き取る〉ことをしていた。

また、療養者が疾患や薬剤の影響下にあることを知り、「どういうときに症状が落ち着いているかご家族さんから聞くことがあります。あ、こういう時に落ち着いているんだってのがわかれば、それが日常生活に取り入れられないかなって」(文献1)と、〈疾患や薬剤に影響されない療養者の状態を見極め〉たり、「ストローでお茶を飲んだりすると、薬を飲む。そのストローも太さとかあるみたいで。その人に合ったストローの太さとか長さとかあって」(文献2)のように〈療養者の身体機能に合った道具があることを理解〉していた。

さらに、「書道や俳句を趣味にしていたことを知り、やるように勧めると療養者が「震える手で、自分の力で懸命に書いてくれたので、文化祭に書道の作品を発表することを勧めた」(文献4)のように〈療養者の「やりたいこと」を刺激し、引き出す〉こともしていた。一方、療養者の望む生活が訪問看護師の判断と矛盾する場合があります、そのようなときも「むせるようになっていたが好きなビールはどうしても飲みたいというし…食事療法などの制限をしないで、自分の好きなように暮らす」(文献7)ことを認めるといふ〈医療により制限されない、療養者の好みに合った生活をしていることを了解〉していた。このように訪問看護師が葛藤する場合は、「いろいろな場面で看護師がかかわっ

て得た情報を共有することで、自分だけの判断に偏らないように」(文献8)し〈捉えた療養者の希望や価値観を、他の看護師と共有して判断が偏らないようにする〉ことで療養者の「その人らしさ」を優先することの保障としていた。

### 3)【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】

このカテゴリは、療養者が自らの死に方を含めた、将来に向けて描く「こうありたい姿」を訪問看護師が探っていることを示している。

訪問看護師は、「病気の妻の介護をしたいということが退院の大きな理由だった」「退院は無理だといわれても、妻を看たいという気持ちが強く退院してきた」(文献7)ことを知り〈療養者が「こうありたい」と考える姿について理解〉していた。また訪問看護師は、「相手の感情を受け入れながら何気ない会話のなかで(最期についての)希望を把握する」「深刻にならないような雰囲気をつくって意思を確かめる」「一見、治療には役立たないような日常生活のなかから意思の把握をする」(文献8)という〈何気ない会話から療養者の最期に向けての意向や希望を探る〉ことをしていた。さらに、療養者が意思をはっきりと伝えられない状態であっても療養者が「何もしないで逝かせて欲しいと家族に話していた」(文献6)のように〈意思決定が可能な時期の本人の言葉を家族に尋ね、最期の過ごし方への希望を押し量る〉ことをし、「年取ったら食べれんようになってしまふ、普通のことや、だか

ら、もう食べんでええようになったんやとか言っはって/ (文献11) という療養者の〈生活歴や価値観から、療養者らしい最期の過ごし方を推し量る〉こともしていた。文献11では、「療養者自身が決めた死期に向かって食事を断つ行動を」うちのステーションではみんな応援してたというか、邪魔しないっていうか」(文献11)のように、〈療養者が望む死の迎え方を否定しない/応援する〉という姿勢でかかわっていた。さらに、療養者の死が近くなると、「療養者が残された家族の大変さを考えて戒名についての希望を息子に伝えていた」(文献7)ように〈療養者が死の前後の儀式に関する希望を持っていないか確認する〉ことをしていた。また、亡くなった後の療養者の表情から「穏やかで非常にいい表情をして亡くなって。あーそうなんだと思った」(文献6)のように〈療養者の最期が満足できるものであったかを振り返る〉ことをしていた。

#### IV. 考察

本研究の結果、訪問看護師は【過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する】【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する】【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】ことで高齢療養者の「その人らしさ」を捉えようとしていたことが明らかとなった。以下、日本の訪問看護師は、高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのか、および高齢療養者が最期まで自分らしく生き抜くことを支援する訪問看護のあり方の視点から考察を述べる。

##### 1. 日本の訪問看護師は、高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのか

自律とは、一般的には「自分の行為を主体的に規制すること。外部からの支配や制御から脱して、自身の立てた規範に従って行動すること」(広辞苑, 2018)である。日本看護協会の改訂版「看護にかかわる主要な用語の解説」(2023)によると、「自律には人格が関連し、人格とは生まれ育っていく中での経験や周囲の人々との関係の中で形づくられた、その人固有の人間としてのあり方を示す。人格を尊重するとは、個人を自律的な主体者として扱うことを意味する」と説明されている。したがって、本研究で取り扱う「その人らしさ」とは、「その人固有の人間としてのあり方」という自律的人格ともいえよう。

そのような、「その人固有の人間としてのあり方と

いう自律的人格」である「その人らしさ」を尊重するためには、ケアを受け取る「その人」を理解することが大前提となる。しかし、ケアを必要としている高齢療養者の「その人らしさ」は、目の前に客観的指標として提示されることはない。あるいは、訪問看護師が今までケアを提供してきた「だれか」とまったく同じではない。そのため、訪問看護師は〈療養者がどんなふう生きてきたか・何を大事にしてきたかを知〉ろうとしたり、〈時間をかけて少しずつ療養者の気持ちや希望を聞き取〉ろうとする、など、目の前にいる高齢療養者に内在する、生きてきた過程そのものも含めて時間をかけて捉えようとしながら関わっていた。さらに、高齢療養者の「その人らしさ」を捉えようとする働きかけが、〈療養者の「やりたいこと」を刺激し、引き出す〉かわりとして現れることもあった。村上(2018)は、「(患者の) 願いの探索は、患者が持っている力を発見することを前提としている」と述べている。高齢療養者の人間としてのあり方を探ることがそのまま、高齢療養者が潜在的に持っている力の発見につながり、希望を引き出すケアとして機能し、「その人らしさ」を尊重するケアに繋がってゆくのである。

訪問看護師が捉える高齢療養者の「その人らしさ」は過去・現在・将来にわたって、療養者が好み、望む(であろう)姿であった。これは、高齢者が長い期間にわたって人生を過ごした存在であり、住み慣れた場所や周囲の人々との関係の中で形づくられるものでもある。訪問看護師が〈自宅という環境に療養者が愛着を持っていることを了解〉したり、〈療養者にとって安心できる家族やヘルパーがいることを了解する〉ことは、愛着ある場や安心できる関係性のなかで生きる高齢療養者の「その人らしさ」の理解が、療養者の尊重に繋がってゆくことを示唆しているといえよう。

##### 2. 高齢療養者が最期まで自分らしく生き抜くことを支援する訪問看護のあり方

野村(2005)は、高齢者のライフヒストリーを分析してその一貫性や構造を検討し、高齢者の人生の振り返りが自我同一性や人生の有意義性に結びついていることを示した。在宅医療・介護の分野においても、介護支援専門員が支援面談時にジェノグラムを作成しながら高齢療養者の家族内人間関係やこれまでの人生を聞き取り、より豊かな支援に結びついたことが示されている(堀越, 2022)。このように、思考が明晰であり、言語による応答が可能であれば、高齢者自身が表



明した「自分らしさ」を、訪問看護師が「その人らしさ」と捉え、支援に結びつけることが可能であろう。

しかし、意思表明能力や認知機能が低下していくことが考えられる高齢療養者には、本人の言葉からのみで療養者の好みや望みを知ることは困難になる。本研究で示された【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する】に含まれる〈日常生活の療養者の言葉や行動から好みや価値観を推し量る〉や〈家族・介護者との関係など、これまで療養者が築いてきた人間関係を知る〉という結果からは、訪問看護師が高齢療養者の言葉だけでなく、生活ぶりや人間関係、家族からの情報を加えて多面的に「その人らしさ」を捉えていることが示唆されたと考える。

また、訪問看護師は、高齢療養者の人生の最終段階に至るまでを伴走することも多い。そのため、本研究の結果である【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】とは、自らの死に方を含めた、将来に向けて描く「こうありたい姿」を探索することであった。〈何気ない会話から療養者の最期に向けての意向や希望を探る〉には、言葉での問いかけだけでなく、高齢療養者の表情や様子を見て取るという、非言語的なかわりも見いだされた。村上(2018)は、「死ぬことは患者の過去と願いをめぐる患者と家族との語り合いのプロセスそのものであることになる。そして語り合いのプロセスの中で「その人らしさ」を彫琢(宝石などをきざみ磨くこと)するという意味で、死は自己の固有性を作り出す」と述べており、訪問看護師が高齢療養者やその家族と言語的・非言語的に対話を繰り返すことによって、療養者のもつ周囲や関係者への配慮や遠慮が溶け、その人本来の希望や望みが表現され、「その人」が露わになるとも考えられる。

さらに、〈意思決定が可能な時期の本人の言葉を家族に尋ね、最期の過ごし方への希望を推し量る〉や〈生活歴や価値観から、療養者らしい最期の過ごし方を推し量る〉とは、在宅における看取りの時期において、訪問看護師は、意思決定能力が減退し、意思疎通が困難となった高齢療養者に対し、人間としての尊厳を保持しつつ本人の望む最期を迎えられるよう「その人らしさ」を探索し続けていたことを示している。田代(2016)は、実際の患者の体験談から、死にゆく過程のなかには「当事者が主体的に生きる側面」と「終局に向かえば向かうほど、本人が決定しえない」側面のふたつがあり、家族や医療者などの関係者たちの「死にゆく過程に本人が主体的に関わることを重視しつつ

も、同時に主体性を発揮しえない問題にも柔軟に対処していく『しなやかさ』が必要であると述べている。

高齢療養者は人生の最終段階において、いつも自発的に理解し、選択する主体として参加できる(=意思確認ができる)とは限らない。そのため、訪問看護師は、本人・家族あるいは他の専門職も交えたコミュニケーションを通して、死にゆく過程における合意を目指すというプロセス(高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン, 2012)を重視していたことを示している。

訪問看護師は対象の住まいに入れていただき、その生活の場でケアを行う看護職である。高齢療養者が生きてきた居室に入り、家族・人間関係を見て取り、元気があったころに生活し楽しんでいた痕跡に触れ、それらの空気を感じながら看護を行う。このような、高齢療養者が住まう「場」でケアをおこなうことそれ自体に、「その人らしさ」を捉えようとする姿勢が存在している可能性もある。しかし、訪問看護師が、疾病や障害をもつ高齢療養者が自分らしく生き抜き、そして「その人らしく」死ぬことを支援するためには、訪問看護師自身の「その人らしさ」の捉え方を自覚し磨き上げ、その人しか生きられない固有の人生により近づけるよう、専門職としての能力を発揮する必要があると考える。

### 3. 研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、質的研究のメタ統合に必要な一次研究の選定のための評価基準として、看護実践の記述が豊富であるということに留まったことである。その理由は、本テーマに関する在宅看護分野の原著論文は未だ少なく、一次研究を評価し基準に合った論文だけを選定することが困難であったためである。今後の課題として、本テーマに焦点をあてた質的研究の積み上げが必要である。

## V. 結論

日本の訪問看護師が高齢療養者の「その人らしさ」をどのように捉えているのかを明らかにすることを目的として11論文を選出し、二次分析を行った。その結果、訪問看護師は、【過去の療養者の姿から「その人らしさ」を類推する】【現在の療養者の姿から「その人らしさ」を了解する】【療養者が将来に向けて描く「その人らしさ」を探る】ことで高齢療養者の「その人らしさ」を捉えようとしていることがわかった。

## 謝辞

本研究は科研費 JP 21K10670の助成を受けたものである。本研究の結果の一部は日本看護科学学会第42回学術集会にて発表した。本研究に利益相反は存在しない。

## 【引用文献】

- 会田薫子(2017). 意思決定を支援する 共同決定と ACP(清水哲郎, 会田薫子編. 医療・介護のための死生学入門). pp77. 東京大学出版会
- 古野貴臣, 藤野成美, 藤本裕二ら(2020). 行動・心理症状の薬物療法を受けている認知症高齢者に対する訪問看護師の判断の視点. 日本在宅看護学会誌, 8(2), 70-78.
- 市来春菜, 沖中由美(2020). セルフケアと意思疎通能力が低下している在宅療養者に対するケアにおける訪問看護師の困難と対処. ホスピスケアと在宅ケア, 28(1), 92-100.
- Kitwood T. (1997). Dementia Reconsidered. The Person Comes First. pp.7-8. Open University Press, Buckingham, UK.
- 厚生労働省(2015). 平成27年度介護報酬改定の骨子. 厚生労働省ホームページ. <https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12300000-Roukenkyoku/0000081007.pdf>. (Aug. 14. 2023)
- 厚生労働省(2021). 介護サービス施設・事業所調査 / 令和元年介護サービス施設・事業所調査 詳細票編 居宅サービス事業所 訪問看護ステーションの利用者. [https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450042&tstat=000001029805&cycle=7&tclass1=000001147766&tclass2=000001147767&tclass3=000001147747&tclass4=000001152787&stat\\_infid=000032073092&tclass5val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450042&tstat=000001029805&cycle=7&tclass1=000001147766&tclass2=000001147767&tclass3=000001147747&tclass4=000001152787&stat_infid=000032073092&tclass5val=0). (Aug. 14. 2023)
- 黒田寿美恵, 船橋眞子, 中垣和子(2017). 看護学分野における「その人らしさ」の概念分析. 日本看護研究学会雑誌, 40(2), 141-150.
- 黒田真由美, 星野純子, 常盤文枝(2021). Good deathを支える訪問看護師が大切にしたい. ホスピスケアと在宅ケア, 29(1), 11-16.
- 花里陽子, 芦谷知子(2017). 高齢者の在宅看取りに関する実態調査 5年間の訪問看護記録より. 死の臨床, 40(1), 175-178.
- 堀越由紀子(2022). 高齢者の支援過程における「ジェノグラムワーク面接」の活用可能性. 星槎大学紀要共生科学研究, 18, 72-86.
- 前原なおみ(2020). 看護師にとって老衰死とはどのようなものか 応援という関わり 看護師Fさんの語りより. 京都看護, 4, 25-37.
- 水野裕(2008). 実践パーソン・センタード・ケア. pp.125. ワールドプランニング
- 村上康彦(2018). 在宅無限大. pp.104. 医学書院
- 森本喜代美(2014). 在宅ホスピスケアにおける訪問看護師のストレスと対処. 京都大学大学院医学研究科人間健康科学系専攻紀要健康科学, 9, 20-25.
- 中村智子(2021). 熟練訪問看護師が高齢者の訪問看護を通して感じるやりがい. 日本在宅看護学会誌, 9(2), 31-40.
- 奈良岡由佳(2020). 住み慣れた自宅で、その人らしく生きるために 在宅看取りとグリーンケアを通して. 健生病院医報, 43, 41-43.
- 新村出編(2018). 自律. 広辞苑 第7版 電子版. 岩波書店.
- 日本看護協会(2023). 改訂版「看護にかかわる主要な用語の解説」(草稿). 日本看護協会ホームページ. <https://www.nurse.or.jp/question/nursing-terms.html>. (Jul. 5. 2023)
- 日本看護協会(2021). 看護職の倫理綱領. 日本看護協会ホームページ. [https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/statistics\\_publication/publication/rinri/code\\_of\\_ethics.pdf](https://www.nurse.or.jp/nursing/assets/statistics_publication/publication/rinri/code_of_ethics.pdf). (Aug. 13. 2023)
- 日本看護協会(2016). 訪問看護入門プログラム 指導要綱. 日本看護協会ホームページ. [https://www.nurse.or.jp/nursing/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/homonkango\\_program\\_educational\\_guideline.pdf](https://www.nurse.or.jp/nursing/home/publication/pdf/fukyukeihatsu/homonkango_program_educational_guideline.pdf). (Aug. 12. 2023)
- 日本老年医学会(2012). 高齢者ケアの意思決定プロセスに関するガイドライン 人工的水分・栄養補給の導入を中心として. 日本老年医学会ホームページ. [https://jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/jgs\\_ahn\\_gl\\_2012.pdf](https://jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/pdf/jgs_ahn_gl_2012.pdf). (Aug. 10. 2023)
- Noblit, G. W. & Hare, R. D. (1988). Meta Ethnography: Synthesizing Qualitative Studies. Newbury Park, CA, Sage Publications.
- 野村晴夫(2005). 構造的・一貫性に着目したナラティブ分析: 高齢者の人生転機の話りに基づく方法論的検討. 発達心理学研究, 16(2), 109-121.
- Paterson, B. L., Thorne, S. E., Canam, C. et al. (2001).

Meta-Study of Qualitative Health Research :  
A Practical Guide to Meta-Analysis and Meta-  
Synthesis. Sage Publications.

坂根可奈子(2021). 訪問看護師が在宅高齢療養者に服薬自己管理に向けた支援を行う看護プロセス. 日本看護研究学会雑誌, 44(1), 61-71.

高橋方子, 布施淳子(2017). 訪問看護師が在宅療養高齢者の代弁意思に添う終末期医療の提供に必要と認識した情報. 千葉科学大学紀要, 10, 75-89.

高橋方子, 布施淳子(2013). 在宅療養高齢者の終末期

医療に対する意思把握に訪問看護師が必要とする情報. 日本看護研究学会雑誌, 36(5), 35-47.

高橋方子, 布施淳子(2012). 訪問看護師による在宅療養高齢者の終末期医療に対する意思把握の方法. 日本看護研究学会雑誌, 35(1), 99-105.

山下由香, 諏訪さゆり(2021). 早く死にたいと訴える認知症高齢者のスピリチュアルペインとそのケア. 認知症ケア事例ジャーナル, 14(2), 115-125.

田代志門(2016). 死にゆく過程を生きる. pp.170. 世界思想社.



---

*Research Report*

---

## Abstract

### How Do Home Visiting Nurses Capture the “Personhood” of Older Adults Requiring Long-Term Care?: A Meta-Synthesis of Japanese Studies

To clarify how Japanese home visiting nurses perceive the “personhood” of older adults in their care, we conducted a literature search spanning the past 10 years (2012–2022) using the Ichushi-Web. We utilized such keywords as “home health care nursing” and “personhood” to identify and select 11 articles that extensively describe nursing practices by home visiting nurses, who have demonstrated respect for the personhood of older adults in their care. From these articles, we extracted specific descriptions of the relevant practices. A secondary analysis was performed, referencing the meta-integration method.

The study findings indicate that home visiting nurses strive to understand the personhood of older adults by inferring their personhood from the past, comprehending older adults’ personhood presently, and exploring the personhood envisioned by their patients for the future. To assist older adults in their convalescence, in living their lives, and passing away “in their own way”, home visiting nurses must be conscious of and refine their own understanding of “in their own way”. They should also showcase their professional ability to help recognize the distinct lives of the individuals in their care.

Key words : visiting nursing, personhood, older adults

MATSUURA Shino, ITO Ryuko